

ほうさく 豊作

この物語は、魚沼と呼ばれる新潟県の地域で起こりました。そこでは、日本の中でももっともおいしいお米がとれると言われています。魚沼に、若い時から毎年、米作りをしてきたある農夫が住んでいました。

ある春の日に、農夫は稲の苗を植えるため田んぼを準備していました。そして、大きな声で不平不満をもらしていました。

「どうして毎年いつも、米を作るときに、なにか不自由なことが起きるんだ。ある時は、雪が降りすぎて田植えのために雪かきをしないといけない。かと思ったら、こんどは雪がほとんど降らないで水不足になる。雨がほとんど降らない年もあれば、降りやまない年もある。ましてやその上に、稲刈りの準備がほとんどできたというときに、台風がやってきて稲を全部倒してしまうこともある。こんな時は、収穫がだめにならないように、倒れた稲を一本一本立て直さなければならないんだ。どうして、こうも不都合なことで俺たちは毎年煩わされるんだ...」と、文句はつづきました。

神様は農夫の不平を聞き、彼が心の中で望んでいるものを与えようと考えました。

「今年はおまえに天候を決めさせよう。」と、神様は彼に告げました。

農夫は、神様が彼のその願いをかなえてくれたことに驚きましたが、正直なところ、これこそがまさに長い間、望んでいたことでした。彼はそれを想像するだけで有頂天になり、もみ手をしながら言いました※。

「今年の収穫は、荷の障害もなく、すばらしいものになるだろう。」

はじめに、田植えにとってうってつけの時期に雪が解けました。その後、日中は暑く、夜は非常に涼しいという日々が続きました。雨は多くもなく少なくもなく、ちょうどいい量が降りました。そしてもちろん、稲の開花の時には、2時間たらずの間、太陽がぎらぎらと照りつけました。

農夫は、自分の田んぼを眺め、たいそう自慢げでした。こんなにも豊富な実を、今まで見たことがありませんでした。

刈り取りの時期が近づいていました。田んぼを干すために水の流入を止めると、晴天の日が続き、雨もほとんど降りませんでした。またこの

年には、台風がすべて遠くを通過したので、心配することは何もありませんでした。稲を刈り、乾燥させて、あとは楽しむだけでした。

今年は豊作となり、その上、魚沼の農家の仲間たちもみんな、天候を考えたのが彼であったことを知れば、彼を尊敬もするでしょう。

ついに、玄米を袋詰めにし、重さを量り、品質を検査するためサンプルを送るときがやってきました。

驚きは二重のものでした。まず、米袋の重さは取るに足らないもので、通常の半分でした。次に、品質の成績は、あまりにも低いものだったのです。

「でも、何が起こったんだ...理解できない。すべてうまくいっていたのに。」と、農夫は繰り返し独り言を言いました。

こうしたことを言っていたまさにその時、神様が口をはさみました。

「おまえは大事なことをひとつ忘れていたんだよ。何か分かるかい...？」

農夫は言葉を失って、なんと答えればよいか分かりませんでした。

そこで、神様はさとすように農夫に話しました。

「お米をおいしくするのは、逆境なのだよ。不都合がひとつもなければ、外見は米の粒が非常に大きくなるが、中身は実もなければほとんど味もないお米になってしまう。さらに、そうした逆境は、農民同士がお互いに助け合う機会をも生むものだよ。」

「おまえは、そのことを考えなかったのかい。」

農夫は、神様の言うとおりでであるということを中心から理解しました。

※スペインでは、うれしいときに手をこするという仕草をします。